新・放課後等の遊び場づくりモデル事業　検討・提案会議（第３回会議）　議事録

１．開催日時　２１年9月8日（火）１０：００～１２：００

２．開催場所　福岡市役所本庁舎１５階１５０４会議室

３．出席者　　出席委員　１５名
横山委員、大谷委員、鈴木委員古賀委員、山下委員、戸部田委員、仲里委員、榎田委員、山部委員、宗委員、西田委員、小野委員、山浦委員、守田委員、在津委員
出席幹事　３名
淵上幹事、大野幹事、長谷川幹事

４．議題　　１　新モデル事業における「遊び」の定義について
２　第３回会議の検討テーマについて
Ⅰ　長期休業中・休日の企画事業について
Ⅱ　新モデル事業の新規開設について
Ⅲ　留守家庭子ども会事業との連携について

５．議事概要　　別紙のとおり

６．会議資料
・資料１：新・放課後等の遊び場づくりモデル事業における「遊び」の定義について
・資料２：第３回会議の検討テーマについて

新・放課後等の遊び場づくりモデル事業　検討・提案会議議事概要

□　新モデル事業における「遊び」の定義について

〇委員長　　体調不良のため進行を副委員長に。

〇副委員長　よろしくお願いします。

【事務局から資料１を説明】

〇副委員長

・４月からの間ずいぶん踏み込んだ整理がされ、プロジェクトの設置という具体的な提案となっている。これについて少し議論いただきたい。

〇委員

・場を見つけ出し、遊ばせるというところまで踏み込むということであれば、その考え方で話し合いをしていかないといけない。させるということになったら大変といわれたが、イベントをやれば当然子どもは楽しむし、集まってくる。問題は、子どもは引っ張りだしても遊ばないということであり、計算上は簡単だが実際はフリーの子どもたちをどう融合させるのか。役所の考えで言っているような気がする。その辺をわかりやすく言っていただいたら分かると思う。

〇委員

・このプロジェクトは、本当に子ども会に必要な部分。集団で遊べる場や機会を与え、親が見て遊びの必要性、集団の大事さに気づいてほしい。この通り進んだら理想的、期待している。

〇委員

・子どもたちの活動を見える形で成果として見せるしくみがない。写真などを出したり、看板やシンボルを作って、この事業が他の保護者や友達に理解されるようになればと思う。プランの中の支えるしくみとして、このような成果のみえるしくみづくりも入れて、アピールしてほしい。

・所在なげに遊んでいるような子でも、その中に発見があったり、虫を見つけたり雲を見たりしていることを評価してあげるよう意識してほしい。そうした掲示物を作るとか、部屋づくりを行うとか、自分で遊びをつくった子どもに認定証をあげたりとか、他の子に教えてあげるよう促すとか、遊びでつながるしかけづくりを、大人が設定していくようなデザインができればと思う。

〇委員

・これまで、友達を作ってほしいという気持ちから、一人遊びはなんとかならないかという見方をしていたが、一つでも、二つでもいいところを見つけてほめてあげることによって、他の子から注目されて友達ができていくというやり方もあるのかなと、今の意見を聞いて思った。一輪車が人気なので、乗れるようになったらほめ、他のスポーツも含めほめてあげるしくみづくりが、自信、友達作りにつながる。

・プロジェクトに関してはすごくいいと思う。ぜひ発展拡大していただきたい。

〇委員

・能動的な遊びと受動的な遊びのバランスをどうすればいいか考えている。今度トランポリンをする予定だが、日ごろ来ない子からも申し込み殺到してかなりの人数になっている。普通の自由遊びは低学年ばかりで高学年が少ないので、夏休みに実施したいと考えていたが、教室の工事があってできなかった。そこで冬休みの実施を考えているので、高学年にどのような遊びがしたいかアンケートをとってみたい。

・見守りサポーターが、子どもへの対処の仕方など、わからないことについて学ぶことができる研修や勉強会の場があれば、スムーズにやっていけると思う。

〇委員

・イベントをやれば勝手に能動的な遊びがでてくるだろうと考えるのは間違い。子どもたちが能動的になっていくようなかかわり方、たとえば、イベントに参加している子に、「ちょっと手伝ってもらえる？」「やってみる？」と促すようなことが必要。遊びたいといったら「じゃあどうしよ

うか」というところからはじめるなど、現場で子どもとどう関わるかにかかっている。

〇委員

・低学年をみるとイベント的感覚が普通になっている。主体的な遊びを小さいときからできていない子どもたちに、遊びにはもっと幅があるということを知ってほしい。アンケートをすればトランポリンや野球などがあがるが、それ以外の遊び、例えば穴掘り・たき火・木登りなどを知らない。様々な遊びのバラエティを、豊かな遊びとして経験させられるかどうかは大人の許容力の問題。自己表現が出来る場としても大切であり、大人がもう少し緊迫感をもつことが必要。

・見守りサポーターは、事故があったら、いなくなったらと心配し、ついつい子どもに張り付いてしまうが、ある程度腹をくくって対応するのも大事。責任は自分でとる、けがと弁当は自分もちということも啓発すべきところ。

〇副委員長

・遊びがいまの子どもたちにとっていかに大事なことなのかを認識してもらうことが、大人が腹をくくってふみこむモチベーションになると思う。

・きっかけづくりといっても、イベントそのものがどのように企画運営されるのかという課題を持っていると思う。この辺の知恵が問われることかもしれない。単に受動から能動にいくわけではなく、大人の態度が論じられている。

〇委員

・登録は１４５名で、普段から多いときで７０名参加するなど、たくさんの子ども達がとても楽しみにしている。トランポリンのイベントのときはいつもより多い約９０名が参加しており、子どもたちが遊びの楽しさを知るという意味ではイベントも必要。

・やはり親との関わり、地域の方々との関わりが重要で、サポーターは常に３，４名見守ってくれている。ただ、保護者は遊びの意義はわかっているが、なかなか仕事が忙しくて参加できない場合もある。地域の子ども会でも同じだろうが、子どもを参加させると保護者もかかわらなければならないため、自分が参加できないということで、子どもの遊びが奪われてしまう。もっと保護者地域に啓発し、理解していただいて、支援体制を学校ごとにつくっていかなければ。

〇委員

・高学年が少ないので、低学年ばかりで遊びのバラエティが限られてしまい、高学年はすぐ飽きて来なくなる。キックベースもルールを知らないから勝手に蹴飛ばして、守備もみんな同じ所に来てしまい、無法地帯になって、結局強い子が牛耳るという後味の悪い遊び方になったことがある。サポーターも集団での遊ばせ方がわからず、むやみに時間を消費してしまったこともある。

・ぜひこのプロジェクトをやってもらいたい。校庭の利用には先生方の理解も必要だし、知名度が無い部分についても、先生方にも協力していただかないと、地域のクラブチームに子どもたちが行ってしまい、学校の中で一緒になる活動ができない。こういう事業も PR していただければ子どもたちも増えると思う。こども未来局によろしくおねがいしたい。

〇委員

・アンビシャス広場は自由スペースで、来たいときに来て自由に帰るという考え方。公民館共催のキャンプとかクリスマス会といったイベントはあるが、週２回強制されることなく、一人で遊んだり卓球をしたり、自由の中で遊んだりすることを通じ、してはいけないことを仲間の中で学んでほしいと思いながら見守っている。自由の中の規律というのを子どもたちに分かってほしい。

・プロジェクトについては、このとおりになれば一番すばらしいと思いながら、自由な遊びも、その中で子どもたちがどう受け取っていくかを見守っていきたい。大人のかかわりが大事な場所であり、自分も能動的な子どもたちを育てていけたらと思う。

〇委員

・豊かな遊びということだが、具体的にどういうことか。子どもが豊かな遊びと意識するのではなく、大人が考えていくことで、教育的な考え方となる。

・さきほどのキックベースの話のように。ゲームや遊びをつくりあげていき、積み重ねて、歴史があるのが楽しい。だから低学年は三角ベースからはじめ、人数が少ない中で楽しみを作り上げて

いく。大人も一緒になって作り上げるという手立てをしなければなかなかできない。
・イベントが悪いということではなく、イベントを通して遊ばせてもらう、その繰り返しの中から子どもたちがつくっていく。種をまかなければ育たないという解釈をすればよい。
・こうすればああなるという簡単なものではなく、遊びの指導があっている中でどう取り入れていくのかが大事。現実的には子ども会などに子どもがおらず、それをふまえながら考えていかないと、理想論に走っていたら実行するのは大変。

〇委員

・イベントはきっかけとして大事だけれど、やはり自分たちが作っていくことを教えていくのが大事で、例えばボールひとつで何が出来るか工夫させていくべき。
・誰もリーダーになれないのが今の子どもの現実で、いい意味でのガキ大将のように、引っ張っていく子をつくるのが学校でも遊びの場でも大事。怪我が心配となるが、そうなったときに「怪我と弁当は自分もち」をいかに浸透させていくかが大事。そういう意識を持っていけば、のびのび遊べるし、保護者も活用していける。

〇委員

・そう思う。きんしゃいきゃんぱすでは、何も遊びを用意せずに開いており、教育的意図はない。子どもたちは自分で遊びを見つけて遊び始めるし、学生スタッフが何か好きなことをやっていると、子どもが取り上げてやり始める。そうして集まり、関係性ができて盛り上がっていくという循環。行きたいと思い、好きなことを見つけ、作っていく遊びが生まれてくると思う。
・豊かな遊びが大事な一方、無理に遊ばせられるのは子どもにとってきついこともあり、一人遊びも大切だと思う。遊ばなくてもいいし、遊んでもいい場が保障されることで、自尊感情が育ち、心の緊張がほぐれる。受動的遊びと能動的遊びが効用につながるというだけでなく、ゆったりすごせることも大事な意味をもたらす。

〇委員

・留守家庭子ども会に来る決まった子どもたちに、生活マナーを教えたり、けがのないよう配慮したりと、いろいろなことを考えながら仕事をしているが、こと遊びのことになると、これもあれもの一つになっていると反省するところもある。留守家庭子ども会と遊び場づくりのどちらに参加していても、同じ子どもであり、学校、地域の子どもであることに変わりはなく、親の都合で留守家庭に行く子もいれば、行きたいときだけ「わいわい」に行く子どももいる。年を経るごとに「わいわい」が定着してきていると感じる。
・ときどきは留守家庭子ども会でもイベントをやるが、「わいわい」で大掛かりな遊びを実施するのは、子どもにとってはうれしい。大人が仕掛ける中で最初は受動的でも、プログラムによって、最後は自分たちで楽しそうに遊んでおり、ああ楽しかったとにこにこ帰ってくる。
・その子を長期的に見ていかなければわからないかもしれないが、遊んでないような子どもも、それが、その子にとって心地よく、自分なりの楽しみ方をそれぞれ見つけるのであればいいのかもしれない。笑顔があればいい。遊びについて自分も工夫がいると思う。

〇委員

・地域の代表として参加しているが、いろんな団体と話をできるという立場から、どう関わっていくべきかを考えている。お年寄りや部外者が子どもたちに接する場合に、どうしても他人の子なので、よほど信念をもった人でないと自分の考えどおりに接することはできない。イベントなどをしながら、保護者にも出て来てもらい、顔つなぎをする機会を設けてもらいたい。そうしないと、しかるのも遠慮してしまうことになる。
・子どもの遊びそのものの優劣を言っているようだが、子どもと子どもが接する時間が長いこと自体が、単独で部屋にいるより評価できること。みんなのなかでひとりだけでやっているのも認めるべきだと思う。

〇委員長

・「豊かな遊び創出プロジェクト」についても、部会の設置の提案も、よく整理できていると思う。
・これを福岡市としていい方向に実現していくための最大の課題は、安全をどの様に考えるかであ

る。これまで私自身は、覚悟を持って、全ては自分の責任というところでやってきたが、個人の思いだけでは限界がある。

・怪我はどういう状況でも起こりうるものであるのに、小さいときから真綿に包んだように管理していくと、危機管理能力を発達させられない。保育の現場でも、転んだくらいで骨を折る、反射的に手が出ず顔面を怪我するというのが、８０年代から指摘されている。歩いて、転ぶとどうなるか、ケンカではどう対処するかなど、ステップを踏んで対応していかなければならない。

・安全に対する目先ではなく、発想の転換を社会に求めることが必要で、裁判官やマスコミ関係者も含め、子どもの遊びに関する社会の意識を変えていかなければならない。子どもの遊ぶ権利を保障するために、何が大事かを発信していく必要がある。責められないようにという中では育っていかない。今いい時期ではないかと思う。

〇委員長

・遊びについては主体的・能動的遊びが中心だが、そこに移行する受動的遊びも検討していこうではないか。それには、大人のかかわりが決定的であり、大人の関わり方、人材育成を検討するプロジェクトを設置したいという提案であった。様々な意見が出たが、全体として肯定的に評価されていると思われるので、設置についての提案を確認するということでよろしいか。ではそのように進めていただきたい。

〇事務局

・ありがとうございました。資料１－２の承認いただいた創造プロジェクトについて、検討チームを設置したいと考えている。若干名とあるが事務局では、プレイワーカー養成講座や冒険遊び場づくりに携わっておられる古賀委員と山下委員を中心に検討チームを構成したいと考えている。

〇委員長

・皆様よろしいでしょうか。（一同拍手）ありがとうございました。

３　第３回会議の検討テーマについて

Ⅰ　長期休業中・休日の企画事業について

【事務局から資料２　Ⅰを説明】

〇副委員長

・夏休みくらい自由にしたらという意見もある。きっかけづくりには絶好のチャンスじゃないかという意見も多かった。

〇委員

・ここで皆さんに確認しておきたい。資料を見ると、２時間くらいのプログラムが夏休みの内容となっているが、長時間というのを２時間で考えるべきなのか。水巻町の子どもクラブとして、福祉課主催で、一日７時間を２８日間、学生が企画しながら実施した。丸一日なので、昼を一緒に食べたり、ケーキを作ったりと、食育の視点、生活の視点が組み込まれていく。夏なので落ち葉を集めて木陰で昼寝とか、まったりする空間も保障する。時間の設定のイメージが違うので、長時間をどう捉えるか確認いただきたい

〇委員

・一日プレイパーク、冒険遊び場などは、４時くらいまでの間で実施する。１時間ではあっというまで、イベントだとこなしていく感覚になる。モデル事業との関連付けをしていくと、最低５時間以上、７時間くらいをたっぷりという時間と捉えてよいと思う。

〇副委員長

・その場は出入り自由なのか。

〇委員

・生活と遊びを関連付け、そうめん流しをしたり、パンを焼いたりして、皆で一緒に食べるのは楽しい。食育すら遊びで、それ自体がやってみたい遊びそのものであり、一日通してという企画は

とてもいい。
〇副委員長
・普段はできないことというのがポイントのようだ。
〇委員長
・そうめん流しやパン作りができているのはとてもよい。今は、もちつきをやっても衛生面から捨てさせる場合がある。

Ⅱ　新モデル事業の新規開設について

〇【事務局から資料２　Ⅱを説明】

〇委員
・実情と違うかもしれないが、休み期間の校庭を使っている状況を見ると、少年野球とかサークルがどういう風に施設を使うかということを主体にされている。その内容と、子どもを遊ばせるという広場の運営とを、一緒の運営委員会でというのは違うような気がする。
・夏休みの行事の中に入り込ませるのは一部賛成だが、あまり頻度を多くする必要ない。校庭では公民館事業などもつづいているので、積極的に参加させていただければ済むような気がする。夏休み中はそれに入っていけば遊び場は保てる。
〇委員
・若久校区で校庭解放は地域主体、わいわいは PTA 主体でやっているので、運営委員会のメンバーは重複していない。一本化するなら打ち合わせが必要だが、できないことはないと思う。留守家庭子ども会の遊び場の確保についても打ち合わせしており、午前中に留守家庭が自由に使い、開放事業は午後からというように調整している。
・子どもを遊ばせるのではなく、遊べない大人が問題。昼間校庭開放の巡回教室の機会を利用して、大人を指導する、子どもを育てる大人の勉強会に変えていただけたらなといつも思う。実施するなら、もう少し実のある巡回教室を希望する。
〇委員
・大人が遊べないというのはほんとうにそのとおりで、事業の目的の中に、「遊び方が分からない大人のしつけ」と入れてもらいたいくらい。もちつきの話もそうだが、せっかく一生懸命やろうとしていることに、一部の保護者が水を差したり、やる気をなくさせるようなことを言ってくる。キャンプファイヤーをしようとした時、学校からも許可を得て、消防団にも来てもらえるということで大丈夫だったはずなのに、なぜ火を使うのかと言ってくる人がいて、できなくなってしまった。せっかくやる気を出してやろうとした場合に、それをそぐようなことが出ないような、何か大義名分のようなものを、行政からしてもらえたら助かる。
〇副委員長
・やろうとすると思いがけない意見がでてきて、それをどうケアしていくのかというのがプロジェクトを実施していくうえで大事。それに対してどう考えていくのかを丁寧に積み上げていくことで開けていく気がする。
〇委員
・どこの学校でも同じと思うが、校庭開放も、留守家庭子ども会も、わいわいも、公民館や遊びの教室も、いろいろな主体からいろいろな事業が降りてくる。地域の子どもたちの健全育成という共通の目的があるにもかかわらず、ばらばらにされており、整理していく時期にある。PTA、地域、学校が連携をとりながら、どう一本化していくのか煮詰めていく時期に来ていると思う。
・保険についてもバラバラで、わいわいは独自に保険に入っている一方で、一度家に帰って遊びに来た子どもはどうなるのか。保険も複雑多様化している。同じ地域の子が同じ学校で遊ぶのだから、安心して一緒に遊べるシステムづくりを。
〇副委員長

・保険については事務局から。
【事務局から参考資料を説明】
〇副委員長
・バックアップシステムをつくりながら遊びを作り出していくということだと思う。新モデルについては期待の半面注文もあるようだ。
〇事務局
・ご意見、ご提案ありがとうございます。ご指摘の点について説明します。
・長期休業中の実施時間については、基本的に昼間の時間というのを対象と考えている。２時間と区切ったわけではなく、調整の結果そうなったもので、夜中に泊まってキャンプをしたいという意見もあったが、基本は昼間ということで対応したい。その中で、子ども会などと連携すれば、たき火など、できることの幅も広がるので、地域との横の連携もテーマとして考えていきたい。
・昼間校庭開放事業との一体化については、新規開設６校の運営委員会では、基本的に今までの運営委員会を取り込んでいく形で説明し、その方向で進んでいる。地域で話していると、今でもグランドが狭いのにというご心配もあるが、現在、昼間校庭開放でやっているように、学校とご相談して調整するというルールが変わるわけではない。また、一本化を必要条件としているわけではなく、同じ委員が何度も出席しなくていいようにとの地域からのご意見に対応して、一本化できるようにしたもの。今後支障がないか検証していきたい。
・巡回教室についてはアンケートなどの状況を踏まえながら検討する。我々も同じ課題認識をもっている。大人の養成についても講習会のメニューはあるが、聞きに来ていただけるかということもあり、先ほどのプロジェクトの中でも考えていきたい。事業を広く周知して関わっていただきながら、一緒に考えるなど、人材育成について考えていきたい。
・保護者への啓発については、皆さんからアイデアを頂戴したい。大義名分というのは難しいが、事業を通じて、取り組みの意義を説明しながらやっていくことによって、新しいものが生まれるのではないか。
・つなぐしくみについて、行政の縦割りとしてよくお叱りを受けるが、この会議でも幹事として庁内メンバーに参加してもらっている。連携を意識しながら検討していきたい。
〇副委員長
・時間がぎりぎりまできた。もうひとつ留守家庭子ども会との連携についての議題があるが、これも丁寧に議論しなくてはいけない。本日の議論は、新しい局面が開かれるのではないかと期待のある議論だったので、飛ばしたくないという思いで進めた。留守家庭子ども会との連携については次回でよろしいか。

〇委員長
・今回、福岡市という大都会が子どもの遊びのためにどう考えるかが方向付けられた。その中で、大人の学習というのが何人からか出ていたし、やる気をそぐことにならないようにという言葉もあった。このような取り組みを進めていることについて、途中でも良いから市政だよりやＨＰで、市としてこういうビジョンを持って健全育成を進めていると、発信を行っていくことが必要。理解者を増やしていくことが、この事業を発展させていくことになり、サポーターも手を上げてくれるようになるだろう。次回は１２月、さらに整理していただいて前進できるように。
〇副委員長
・では閉会します、事務局から。
〇事務局
・次回は１２月、近づいたら日程調整ご連絡します。留守家庭子ども会との連携とともに職員の配置や、ボランティアのあり方などの、運営体制、手法等について議論いただきたい。事前にご意見頂戴しまして会議に臨みたいので、よろしくお願いします。